

令和5年度こころの健康センター運営協議会 議事概要

開催日時：令和6年3月14日（木）19時30分～20時30分

開催場所：子ども家庭総合センター 4階 多目的室

出席者：内田直委員、丸木努委員

欠席者：峯真人委員、加瀬裕之委員

事務局：黒田所長、辻村所長、佐藤主幹、嶋田主幹、西尾所長補佐、塚田係長、戸矢係長、
沼澤係長、手塚主任

公開・非公開の別：公開

傍聴人の数：0人

会議資料

- ・次第
- ・委員名簿
- ・さいたま市こころの健康センター運営協議会設置要綱
- ・令和5年度こころの健康センター事業実績報告
- ・令和4年度こころの健康センター所報

1. 開会

2. 挨拶（辻村所長）

3. 議事

（1）令和5年度こころの健康センター事業実績報告

事務局より配布資料に沿って説明

（2）今後の運営に関する意見交換

【黒田所長】

相談件数は減ってきているが、コロナの影響があったりするのかな。細かい点は難しいと思うが、印象としては子どもが減っている感じなのか。

【西尾課長補佐】

大体去年と同じぐらいの相談が来ている。ただ、スタッフが減っている問題も大きいかなというのはある。また、各区役所に拠点ができたので、そこでの相談が増えていたりする。コロナの影響も大きく、コロナ期間中も相談数は増えていた。

【黒田所長】

アルコール依存症の相談件数もそれほど減ってないか。

【西尾課長補佐】

専用電話相談もそれほど減っていない。ただ、自殺に関してはコロナの前後3年間で比べると2倍に増えている。

【丸木委員】

コロナも明けてきて、入院患者が増えて少し元に戻ってきている。自殺者については救命で運ばれてくるような人は減っている感はあるが、ちょっと首にロープ巻いただけで今は自殺と取られることもあるため、こういう方は若い方で多いと感じている。

今日も知的障害手帳を申請される方の診察に行ったが、このところ若い方と50代ぐらいの方1例ずつというのが多い。若い方だとほとんどの人はいじめにあっている。親が見栄を張って普通学級に入れてしまい、そこで成績が悪くいじめにあう。小学校、中学校は、ほとんど行ってなくても卒業できてしまう。本当に基礎的な知識がない方が多く、小学校の低学年から中学年ぐらいの知識があればもうちょっといけるんじゃないかという方が多い印象がある。

高齢者の方は、働いていても駄目なのだけと再度の就労のため就労支援を受けたくて取り組むという方がほとんどで、圧倒的に軽度知的障害と判定される方が多い。

全体的には縦割りでいろいろ仕事ができていると思うが、自殺対策なんかは、GPE ネットを使って入院を取ってくださいますと言うだけではなくて、自殺の仕方が強い方であれば、保健所とかと連携して措置入院で入院することも考えていただければと思う。

【内田委員】

アルコールについては、さいたま市の地域の社会的構成がどういう特徴を持っているのか、他の地域の情報とも比較しながら見ていくのは必要なると思う。依存症家族グループなどの利用者が減ってきている場合には、どうしたら増えるのかという視点で社会の構造を考えたりとか、そこにヒントがあると思う。

それから、教育委員会のほうからブレイクスルーがうまくできると子どもにアプローチできるんじゃないかと常々思っている。

【丸木委員】

発達障害に対しての対応はやはり必要になってくるんじゃないかと、最近気になっている。爆発的に発達障害の人が増えているような感があり、みんながみんな薬を飲めば良くなるってわけじゃないので難しい。

【内田委員】

個別相談の予約は取れますか。待ちはそれほどないですか。

【西尾課長補佐】

頑張っ取っている。待ちは1ヶ月ぐらい。

【内田委員】

クリニックでは子どもの予約は半年ぐらい待つようなので、まだいいですね。

私のところにみえるような高校生以上はそれなりの治療のモチベーションもあるし、自分がやってきた成人の精神医療の枠組みで何とかできるが、児童思春期はまず本人の治療へのモチベーションがないため、専門的な視点で治療に導いたり、こういう施設も利用しながら、遊びの要素なんかも入れてクリニックと連携してやっていくのは大事だと

思う。児相との連携はどうか。

【西尾課長補佐】

例えばゲームの問題から家庭内暴力とかに発展するケースがあり、警察を呼ばれて、そういう場合は警察から児相に連絡が行くので、児相でまず相談を受けて、でもこれはこちらの健康センターのほうがいいのではという時に依頼が来る。大人のケースでも、子どものSOSで児相が介入したが、蓋を開けたらお父さんにアルコール依存があったという場合には、こちらでお父さんのほうの相談でみえたりする。

【内田委員】

コロナも明けてきたし、人がなるべく会うような機会を作ったりしながら横の連携をやっていくと、うまく回るものができる可能性はあると思う。教育委員会も含めて、教育というところも交えながら共有することで、この地域の児童思春期の精神保健が充実し、モデルになる可能性はある。

【黒田所長】

昔は養護の先生の研修とかをやっていたんですけど、最近はどうですか。

【西尾課長補佐】

直接養護の先生とはあまりないが、教育の依頼を受けることがあり、お話しする機会は昨年度より増えている。教育委員会とコラボして授業をやらせてもらう機会や、グロースという不登校支援センターで、職員と一緒に不登校の子の授業をオンラインでしたり、少しずつ教育委員会と連携は進んできている。

【黒田所長】

不登校支援に力を入れることで今までと違った支援の流れみたいのができていかないかという期待はすごいある。丁寧にやっているのでアプローチはいいのかなと思うが、それをいろんな学校の先生たちで共有できるかは、一つの大きい課題だと感じる。

あとは、行政は情報発信があまりうまくないので、YouTubeとかをうまく使って情報発信を考えてもよいのではないか。自分たちで作らなくても、どこかのリンク貼るのでもいいかもしれないが、市がリンクを貼るとそれなりに責任を取らなくてはいけないので、そこは慎重にする必要がある。

【内田委員】

ニーズのある人に行き渡ることが大事。責任というところで何が起こるかを想定しながらわかりやすい情報発信をすると、その知識がさいたま市以外の日本各地に広がっていくことさえ起こる可能性がある時代。わかりやすく魅力のある情報発信はとても大事だと思う。

(3) その他

特になし

4. 閉会